

# テキストとコンテキストを融合した研究で作家の真の声を読み解く

## 日本では認知度の低い大作家、 ヘンリー・ジェームズ

「私は19世紀後半から20世紀初頭に活躍したアメリカ人小説家、ヘンリー・ジェームズの研究をしています。」と竹井智子准教授は言います。「アメリカ文学界ではジェームズは重要とされる作家ですが、一般の認知度はかなり低いと思います。それに対して、例えばトムソーヤのマーク・トウェインであれば名前くらいは聞いたことがあるという方が多いと思います。」ジェームズの認知度が低い理由について、竹井先生は次のように語ります。「一つには、文体が難しいということがあります。また、彼が描いたのがヨーロッパを舞台にした上品な貴族文化であったことも影響しているでしょう。それは、トウェインと大きく異なる点です。アメリカ西部出身のトウェインは、何を書くかという点において革新的で、アメリカ独自の文学を作りあげました。例えば、世話になった人の逃亡奴隷を助けることは、当時のキリスト教の教義でいえば良心に反しますが、人間本来の良心からみれば奴隷を解放することのほうがいい、そういったポリティカルな内容をトウェインは小説に盛り込みました。それに対して、ジェームズはアメリカ東部出身で、父親の教育方針によりヨーロッパに渡り、各地を転々としたので、ナショナリティの感覚が普通のアメリカ人とは違うと思います。彼の小説は、内容的にはヨーロッパ小説の伝統の流れを受けており、何を書くかという点よりも、如何に書くかという点において、小説に改革をもたらしたといえます。従来、読者にとっては小説の筋を追うことが面白いことでしたが、ジェームズは、様々な小説技法を導入し、娯楽的な要素の強かった小説を芸術の域にまで押しあげた作家であると言われていました。しかし実際には、彼の小説は読み物としても面白いです。例えば短編『ダイジー・ミラー』などの国際挿話物では文化や価値観の衝突が、『ねじの回転』のような幽霊物では、人間の抑圧された意識などが扱われています。」

## ジェームズが小説に導入した「視点」の技法

ジェームズが明文化した小説技法として特に有名なのは、「視点」の技法であると竹井先生は言います。「物事は、絶対的な真実といったものではなくて、誰の意識を通して

認識されるかによってゆがめられます。認識者が物事をどのように認識するのかという問題は、小説を如何に書くかという問題に繋がるのですが、意識的に認識者の視点に立って描くというジェームズの技法は、現在では当たり前です。読者が事実だと思って読んでいたら、どこかで、自分がそれまで視点人物によってゆがめられたリアリティを見せられていたことに気づくわけです。またジェームズの小説論には、House of fictionという言葉があります。小説の家にはたくさんの窓があって、この窓から見るとあの窓から見るのでは見え方が異なります。ジェームズの書き方からは、ひとつの窓にひとつの顔が固定されているとも解釈でき、他者の視点に立つことの困難さも示唆しているように思います。「視点」の技法の他に、時間の使い方にも特徴があります。ジェームズの作品では、時間は現在進行的に継起するのではなくて、登場人物が過去を振り返ることが非常に多いです。その結果、過去完了が多用されるわけですが、その点も特徴としてよく指摘されます。」

## 様々なテキストを読み解くために

竹井先生が学生時代に専攻していたのは、経済学でした。「地域産業論という分野で、卒業論文は、京都の和菓子産業をテーマとして書きました。しかし、どうやら自分はテキストが伝えるメッセージだけではなくその伝え方、つまり形式に興味があることに気がつき、大学院では文学を専攻することにしました。」

「私の恩師の言葉で『アジ演説でもよいのに、なぜ文学作



品という形で訴えようとしたのか、それを考えてみなさい。」というものがあります。この比喩ではいかにも政治的な内容を思い起こさせるかもしれませんが、政治に限ったことではありません。何百ページにも及ぶ小説が伝えるメッセージは、もしかすると100語ぐらいで要約できてしまうかもしれません。にもかかわらず作家が何百ページも費やしたことを、読み手は無視するわけにはいきません。ストーリーを軸に様々な要素がテキストには編み込まれているわけですから、読む行為によってそれらをいわば体感しながら、作品に含まれた作者のメッセージや社会背景を読み解くことが、文学研究の面白さと言えるのではないかと思います。」

文学研究の方法について、竹井先生は次のように語ります。「まずテキストの精読が重要です。それに加えて、コンテキストのなかにテキストを位置づけることが大切です。コンテキストについては様々な調査が必要です。歴史的背景や伝記的事項もありますので、新聞や雑誌等の当時の文献の調査や、ジェームズの手紙なども検討します。ジェームズには『ボストンの人々』というフェミニズムを扱った作品がありますが、ここでは、フェミニストが非常にいやな人物として描かれています。彼はアンチフェミニズムだったのかというと、必ずしもそうではありません。アンチであったのは雑誌の編集長でした。ジェームズは職業作家なので、連載してもらうためには、編集長の意図に従わざるを得なかったのです。さらにジェームズ自身のフェミニズムに対する姿勢については、さらなる細かい精読や、ジェームズの他の文献を読み解く中から明らかにしていきます。テキストだけだと独りよがりになりがちで、コンテキストばかりでもそのテキストにこめられた意図を読み誤ります。テキストとコンテキストをきちんと融合した形での研究が大事です。」

## 先人の研究を継承し、 ジェームズ研究の道を究めたい

竹井先生は、現在、英語関連の科目のほか、大学院で批評理論に関する科目を担当しています。文学研究者になるわけでもない学生が、文学に学ぶ意義について、竹井先生は次のように言います。「文学を読むことで幾つもの人生を送ることができるというのはよく言われる話ですが、排他的で自分しかみえない人が跋扈する社会にならないようにする



基盤科学系

竹井智子准教授

ためには、他人のことを慮る力、想像力を培うことは大切なことだと思います。それに加えて、自分の考えを持つためには、テキストを読む力を養うことも必要です。」

竹井先生は、今後の抱負を「ジェームズ研究者として道を究めたい。」と言います。「かつては日本でもジェームズ研究者が多かったのですが、今は減っています。そのため研究の継承を行うことが大切です。多作で難解なジェームズは、長年研究を続けていても全然至りません。」

お薦めのジェームズ作品として、竹井先生は、「大使たち」を挙げます。「この小説のテーマはsense of too lateで、人生を精いっぱい生きる機会を逸してしまった55歳のストレーザという男性が主人公です。彼が人生の先輩として若者に対して発する“live all you can”というセリフが印象的なのですが、彼が言いたいことは、人生で何をするかではなくて生の充実を得ることが重要であり、それは人生をどのように認識するかということに他ならないということです。これは、ジェームズが自分の作品で体現しようとし続けたことそのものです。この小説はストレーザの視点で描かれていて、視点の技法が最も成功した作品と言われていきます。ぜひお読みください。」